
死に際のトン子ちゃん

狭間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死に際のトン子ちゃん

【Nコード】

N3767G

【作者名】

狭間

【あらすじ】

漂流した先は何もない島だった主人公は仲間の“豚”を食べるか悩むのだが……

トン子はいい気なものだった。こんな状況になっても幸せそうに日向ぼっこしながら寝ている。ふくよかな丸いおなかを出しながらいびきまでかいている始末だ。白い肌に埋め込まれた黒真珠のような目も今は線でしかない。本当に幸せそうに寝ている。俺は彼女を食べようか悩んでいるのに……。呼吸をする度に大きく上下するお腹を見るとそのまま嚙り付きたくなってしまう。歯を立てたら簡単に食いちぎれそうだ。

船が完全に流されてしまったせいでやっとたどり着いたこの島はトン子の食べられそうな草しか生えていない。なんで一緒にいるのが情熱的な女性や15人の少年ではなく“豚”なのかと呆れられそうなものだがトン子は俺にとって家族のようなものだ。人間一人に犬と猫と豚一匹づつの家族構成の中で豚一匹の割合はでかい。それに彼女は彼女を生んですぐ死んでしまった母親のブー子のたった一つの忘れ形見なのだ。トン子は俺の下で赤ちゃんの頃から寝食をともにしてきた。勿論ブー子の最後も家畜としてではなく家族として丁寧扱わった。これは言わずもがなだ。彼女は死の際でアイコンタクトで俺に懇願したのだ。

『お願い。トン子を立派に強く育ててあげて……』

マズイ、思い出して目頭が熱くなってきた。そのトン子を……。俺がブー子の願いを受け継いで以来ずっと一緒だったトン子を、食料としてみようなどと。俺はどうかしていた。

……と思うのだが体は言うことを聞かずよだれが光っている。漂流しておきながらなんでこんなに条件が揃ってしまうのか。俺は神と自分自身を恨まずにはいられない。上手い具合に俺の犬歯は他人よりも鋭く、これをトン子にぶすつと突き刺すのと、箸で豆腐を突き刺すのとそう変わらないだろう。

駄目だ。我慢できない。幸い水はあるのでなんとか生き延びている

がもはや俺にはトン子が食料にしか見えない。漫画なんかではよくこういう葛藤を表現するのに頭の中で天使と悪魔が口論する姿が描かれるが、俺の場合おそらく天使の姿はブー子だろう。悪魔は言わずもがなだ。考えてみると良く我慢したものだ。もう背中と腹がつつくなんてのが比喩表現ではなくなっているし、幻覚も見え始めた。足だけ……足だけ。俺はそう思っただけでゆっくりとトン子に近づいていく。だがその瞬間トン子の目がぱちつと開く。俺は罪悪感に襲われて後ずさりするがトン子は構わず鼻をひくひくさせて走り出した。

豚は鼻がいい。犬の俺なんか足元にも及ばないほどだ。何か見つけたのかもしれない。俺は食べ散らかした元は主人だったものと友達だった骨をそこに残しトン子の後に付いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3767g/>

死に際のトン子ちゃん

2010年11月23日17時33分発行